



ストーリーを構成する自伝的推論の働き : 自伝的記憶と自己に着目して

中園, 佐恵子

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 15(2):19-26

(Issue Date)

2022-03-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013199>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013199>



ストーリーを構成する自伝的推論の働き

—自伝的記憶と自己に着目して—

Autobiographical reasoning which constructs a story:

Focus on autobiographical memory and the self

中園 佐恵子*

Saeko NAKAZONO*

要約：「自己と記憶」の関係を探ることは心理学の大きなテーマの一つになっている。近年、記憶が自己をどのように支えるかということに関連する概念として自伝的推論が提唱された。自伝的推論は自己が記憶をどのように支えるか明らかにするために、着目することが不可欠だと考えられている。本論文は自伝的推論はどのように自己と記憶の両方に関連する可能性があるかを先行研究から検討した。自伝的推論は記憶のうち、自伝的記憶と関連が深い。自伝的記憶にはストーリー、もしくはストーリーの一部を構成するという独自の特徴がある。この特徴を作り出すのが自伝的推論の働きである。特に自伝推論はライフストーリーを構成するという働きがある。ライフストーリーは自己と関連が深いことを指摘されている。自伝的推論がライフストーリーを構成することそのものを通して、自伝的記憶と自己が関連する可能性が考えられる。自伝的推論とはストーリーを構成する過程そのものであり、自伝的記憶と自己の両面に関連すると定義することができる。自伝的推論研究は自伝的記憶の面から始まっており、今後は自己の面からも自伝的推論を検討することで、より明確な自伝的推論の働きが明らかになるだろう。

キーワード：自伝的記憶、自伝的推論、自己、ライフストーリー

1. はじめに

心理学において「自己と記憶」の関係を探ることは一つの大きなテーマになっている。高橋・佐藤(2008)によれば、「自己と記憶」の関係は様々な分野で知見が蓄積されてきており、現在は隣接領域との情報交換によって研究として成熟していくことが求められている段階という。記憶がどのように自己を支えるかは、今後、検討していくべき重要なテーマである。

記憶がどのように自己を支えるか、それに関連する概念として自伝的推論 (autobiographical reasoning) という概念が記憶の分野で提唱された (Habermas & Bluck, 2000)。記憶の内、特に自伝的記憶 (autobiographical memory) との関連が言及されている。自伝的推論は自伝的記憶がストーリーを構成しているという独自の特徴をもたらし (佐藤, 2014)。自伝的推論は検討が始まったところの概念であり、明確にどのような働きがあるかは検討して

いる最中である (佐藤, 2008a; 佐藤, 2014; 佐藤・清水, 2012)。

本論文は自伝的推論の中心となる主な働きを整理し、自伝的推論がどのように自己と記憶の両方に関連する可能性があるかを、特に自伝的記憶がストーリーを構成しているという観点に着目して検討する。本研究における自己とは、記憶研究における自己であり、高橋 (2000/2011) の定義を採用して、想起する主体と定義する。また、今後の自伝的推論研究についても展望する。

始めに、自伝的推論と関連の深い自伝的記憶研究の流れを概観し、自伝的記憶がストーリーを構成する独自の特徴を持つ点を述べる。次に、先行研究で自伝的推論の指摘されている働きを、自伝的推論がストーリーを構成する働きを持つ点を中心に整理する。そして、自伝的推論がどのように自己とも関連するかについて、ストーリーを構成する働きに着目して論じる。最後に、自伝的推論の主な働きを定

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

(2021年9月16日 受付)
(2022年1月24日 受理)

表 1 類似概念の定義

概念名	定義
ストーリー	複数の出来事をつなぐことで構成される物語
語り	ストーリーを語ること
ライフストーリー	個人の人生に意味と統一性と目的を提供する自己の物語（家島，2012）
ナラティヴ	広義の言語によって語る行為と語られたもの（やまだ，2021） 本研究でのストーリーと語りの両方を含めた概念である。

義する。また、自伝的推論研究の主な動向を整理し、今後の自伝的推論研究について展望する。

また、本論文において頻出する専門用語について、以下のとおりに定義する。ストーリー（story）とは複数の出来事をつなぐことで構成される物語と定義する（森岡，2015）。本研究では語りはストーリーを語ることと定義する。ライフストーリー（life story）は個人の人生に意味と統一性と目的を提供する自己の物語であると家島（2012）が定義している。その他、類似する概念については表 1 に概念名と定義を示した。

2. 自伝的記憶とは

始めに自伝的推論と関連の深い自伝的記憶について概観する。心理学の中で認知心理学が誕生すると、記憶モデルが数多く提示された。二重貯蔵モデルやワーキングメモリなどはそのうちの一つである。生態学的妥当性が重視されるようになると、日常記憶の研究が盛んになった。そのような中で自己に関わる記憶である自伝的記憶の研究が活発になった（太田，2011/2014）。また、日常的に記憶を解釈するリメンバリングの働きが注目されるようになった（Habermas, 2011）。

自伝的記憶は個人的な思い出の記憶という点ではエピソード記憶と似ている。佐藤・清水（2012）は、自伝的記憶はエピソード記憶の中でも特に自己との関わりが強い経験の記憶と定義している。佐藤・清水（2012）では自伝的記憶とエピソード記憶を同一のものとするか、明確に区別するか研究者によって立場が異なることを紹介している。

佐藤（2008a）によると、自伝的記憶は他の記憶よりも、自己に関わるという点を定義において強調していると指摘している。個人史を構成することが自伝的記憶の特徴であるとする定義もある。自伝的記憶は、特に自己と関連する記憶の側面を扱っていることが分かる。

自伝的記憶の研究は、自伝的記憶の構造と自伝的記憶の機能を検討する二つの側面があると指摘されている（佐藤，2008a；佐藤，2008b）。自伝的記憶の構造は、自伝的記憶がどのような形で貯蔵さ

れ、検索されるかという側面である。自伝的記憶の機能は、自伝的記憶が何の役に立っているかということで、主に自己機能、社会機能、方向づけ機能の三つがあると指摘している（佐藤，2008a）。自己機能は自己の一貫性や連続性を支える、望ましい自己像を維持するような自己に関わる機能のことである。社会機能は対人関係やコミュニケーションに関わる機能である。方向づけ機能は自伝的記憶が様々な判断や行動の役に立つという機能である（佐藤，2008/2012）。

自伝的記憶の研究は始め、構造の検討の研究が主に行われ、バンプ現象の存在が明らかにされるなどの成果を得た。現在は、徐々に機能の検討も進んでいる。機能の検討はナラティヴ・アプローチの影響を受け、ライフストーリーを含んだ理論化が進んでいる（佐藤，2011/2014）。

3. 自伝的記憶とストーリー

自伝的記憶のライフストーリーなどを含んだ理論化が進んでいるということが佐藤（2011/2014）によって指摘されているが、自伝的記憶が想起の際、ストーリーとして想起される側面もある。

高橋（2000/2011）は自伝的記憶の大きな特徴として、想起の際、一定の形式を持つ語りやストーリーとして想起されるという特徴があることを指摘している。自伝的記憶は、想起される際に再構成されるという特徴があるが、自伝的記憶がストーリーとして想起される特徴から自伝的記憶の想起内容が変動することを語り口が変化するためであると説明している。また、人が自己の同一性を感じるのは、一定の個人ごとに特有の語り口が維持されているからと説明している。

Radvansky（2017）はエピソード記憶が一つの出来事の記憶であることに比べ、自伝的記憶は複数の出来事にまたがっていることが多いことを指摘している。自伝的記憶はストーリーの一部だと思われるような同じ時期に起こった出来事がまとまって想起されやすい、因果関係のある出来事がよく想起される、同じ人、場所、活動を共有する出来事がよく想起されるなど、ストーリーの記憶の体制化と同じ特

徴を持つことも指摘している。Radvansky (2017) はこのようなストーリーの構造は常に見られるわけではないことも指摘している。写真を時間順に並べるような、ストーリーにするにはあまりにランダムな断片では、見られないようである。Radvansky (2017) は、自伝的記憶にはストーリーのように複数の出来事がまとまって想起される面があることを指摘している。

岩田 (2008) は子どもが自伝的記憶をストーリーとして語るようになる発達過程を示している。2～3歳で記憶を自伝として語り始める。4歳～5歳で自伝的記憶によって一連の出来事が自己の生活史に統合されていく。過去から現在までの流れに自分を位置づけ、自伝的記憶として語るようになる。6歳でストーリーの構造を意識して語ることができる。

自伝的記憶とストーリーを関連させる理論は、Conway (2005) でも示されている。Conway (2005) は自己と自伝的記憶を関連させた自己—記憶システム (self-memory system) というモデルを提唱し、ライフストーリーを理論の中に含んでいる。自己—記憶システムの中では自伝的記憶知識ベース (autobiographical memory knowledge base) の中にライフストーリーが含まれている。自伝的記憶知識ベースは長期記憶に保存されている。自伝的記憶知識ベースは概念的自己 (conceptual self) とエピソード記憶から成っている。概念的自己は抽象度の高い順に階層構造を成しており、エピソード記憶がまとまって最終的にはライフストーリーを構成する。ライフストーリーには自己イメージなど自己に関する知識が集まっている。ライフストーリーは自己を語る上で重要な主題 (theme) がつながって構成されている。ライフストーリーの下位水準に位置するのが生涯時期 (lifetime period) である。主題ごとに分類された知識が時系列で構造化されている。その下位水準に位置するのが一般的出来事 (general events) である。一般的出来事は一連の出来事などで形成されている。エピソード記憶はそれぞれの出来事における詳細な情報が含まれている (Conway, 2005; 堀内, 2012)。

佐藤 (2014) は自伝的記憶はストーリーそのもの、もしくはストーリーの一部を構成するというエピソード記憶にはない独自の特徴があると指摘する。佐藤 (2008b) は、自伝記憶はライフストーリーと密接に関連していると指摘している。

このように自伝的記憶は想起される際、ストーリーとして語られる側面があることやストーリーを構成する独自の特徴があることが指摘されている。自伝的記憶のストーリーの構造を作り出すのは自伝的推論である。

4. ストーリーを作り出す自伝的推論

このように自伝的記憶は想起の際、ストーリーとして語られる、ストーリーを構成するなど、ストーリーと関連して論じられる面がある。近年、自伝的記憶がストーリーを構成する独自の特徴を作り出す働きとして自伝的推論という概念が提唱された (Habermas & Bluck, 2000; 佐藤, 2014)。人生で意味のある出来事はテーマや因果関係によってつなぎ合わされるという記憶の特徴を強調するために、自伝的推論は提唱された (佐藤, 2014)。佐藤 (2008/2012) では「想起された出来事を解釈・評価したり、過去の記憶を互いに結びつけたり、過去の記憶と現在の自己を結びつけたりする、内省的な思考過程」と自伝的推論を説明している。また、佐藤・清水 (2012) では「想起を通して過去の自分と現在の自分を対比させたり、あるいは過去から現在まで変わらぬ自己像を確認したり、複数の出来事を結びつけて解釈したり、過去経験から何らかの洞察や教訓を引き出して今後の自己の行動指針としたりする」働きのことであると示されている。様々な働きがあるが中心となる働きは「過去の出来事と自己を結びつける内省的思考」である (佐藤・清水, 2012)。

5. ライフストーリーを構成する自伝的推論

自伝的推論はライフストーリーを構成する働きを持つ。Habermas は自伝的記憶を自伝的リメンバリング (autobiographical remembering) と、自伝的推論に分けて捉えた (Bluck & Habermas, 2000)。自伝的リメンバリングは特定の記憶のエピソードの検索と再構成をする働きである。このことから Habermas は自伝的推論が自伝的記憶の働きの一つであると捉えていると考えられる。

ライフストーリーの一貫性には、4つの種類がある。時間的一貫性 (temporal coherence)、伝記の文化的概念 (cultural concept of biography)、因果的一貫性 (causal coherence)、主題的一貫性 (thematic coherence) の4つである (Habermas & Bluck, 2000; Habermas, 2011; 佐藤, 2008b)。4つの一貫性は global coherence と総称される。global coherence があることで、ただ出来事の記憶が羅列されている状態から、一貫した筋のあるライフストーリーになる (Habermas, 2011)。ライフストーリーは単なる記憶の集合ではなく、4つの一貫性があることで、集合以上のものになっている。4つのタイプの一貫性が、ライフストーリーを作っている (Bluck & Habermas, 2000)。

時間的一貫性は、出来事がライフストーリーの中で時系列順に並んでいるという一貫性である。この一貫性を作るには、時間順に出来事を並べる必

要があるため、カレンダーの知識が必要になる。また、時間的一貫性は、時間を越えたライフサイクルの感覚を自己に与える (Bluck & Habermas, 2000; Bluck & Habermas, 2001; Habermas & Bluck, 2000)。

伝記の文化的概念は、人が所属する文化で規定された自伝の書き方のルールである。文化の規範は文化の中で決まった人生の段階を定義し、次の人生の段階に、どの年齢で移るかを示す (Bluck & Habermas, 2000)。それぞれの人の文化において一般的に、人生で経験する出来事にどんなものがあるか、その文化の枠組みを示すものである。ライフスクリプト (life script) と同じものである (Habermas, 2011)。年齢における発達段階の移り変わりの知識なども含まれる (Bluck & Habermas, 2000; Bluck & Habermas, 2001)。

因果的一貫性は、原因—結果の関係によってなぜ、その出来事が起こったかを説明するという一貫性を示す。自己が変化するような出来事に出会った時に、理由付けを行い、自己の連続性を保つ働きがある。転機の出来事や人生の移り変わりの説明を行う (Bluck & Habermas, 2000)。この一貫性は人生のエピソードをつなぐことで、連続性を作る。不連続な部分の橋渡しもする。この一貫性がなくなると、ライフストーリーが意味のあるまとまりではなくなる (Bluck & Habermas, 2000)。

主題的一貫性は、複数の出来事が共通のテーマでままとまっているという一貫性である。自己の安定して存在する部分をテーマとして抽象的に抽出したものである (Habermas, 2011)。

Habermas, Ehler-Lerche, & de Silveira (2009) はライフストーリーの大まかな時系列の構造を検証した研究である。時系列に出来事を並べる方法は、4つの一貫性のうち、時間的一貫性に関わる。文化の影響も受けるので、伝記の文化的概念も関わる。検討の結果、ライフストーリーは本人の誕生から始まることが多く、現在の自分や未来の自分に言及して終わることが多いことが示された。時系列順にライフストーリーをどう構成するか、年齢による発達の違いも検討している。12歳頃は、直線的に時系列順にライフストーリーを作るようになるが、ライフストーリーの始まりや終わりに成熟した全体の評価の言及がない。16歳になると、ほとんどの人がライフストーリーを回想的な全体の評価で終わるようになる。Habermas は4つのライフストーリーの一貫性について詳細に検討し始めている。

6. 自伝的記憶と自己

佐藤 (2011/2014) は記憶がどのように自己を支えるかを明らかにするためには、自伝的推論の過程

に着目することが不可欠であると指摘する。自伝的推論は記憶が自己をどのように支えるかに関連する過程と考えられる。佐藤・清水 (2012) では、自伝的推論の中心的な働きは自己と出来事をつなげる働きであると指摘している。

では、自伝的推論はどのように自己と関わるのだろうか。自伝的推論はライフストーリーを構成する働きとも関連する。ライフストーリーはそもそも自己と密接に関連する。

ライフストーリーとは個人の人生に意味と統一性と目的を提供する自己の物語である (家島, 2012)。人は自分の人生にうわべの統一、目的、意味を与えるため統合されたライフストーリーを作る (McAdams, 2013)。

McAdams はアイデンティのライフストーリーモデルを提示した。McAdams は自己のアイデンティの基盤はストーリーであるとし、アイデンティはストーリーの形式を取るとした。この場合、アイデンティティを特にナラティブ・アイデンティティという。ナラティブ・アイデンティティにおけるストーリーとは、ライフストーリーのことである (家島, 2012; McAdams, 2001)。

また、一つのライフストーリーにイマージとして様々な自己の側面を統合することもできる。イマージとは物語の主人公のことである (McAdams, 2001)。

ライフストーリーは動機づけや自我発達の影響を受け、強調されるテーマが変わったり、ライフストーリーの構造が変化する傾向がある。力の動機づけが高い人は主体的なテーマを強調し、ライフストーリーの重要なシーンの違いを知覚する。親密の動機づけが高い人は親交のテーマを強調し、ライフストーリーの重要なシーンの異なる要素の一致点を見抜く。高い自我発達の人は個人主義の枠組みを持ち、ライフストーリーが複雑になる。低い自我発達の人は伝統に従った見方をし、一貫したナラティブを作る (McAdams, 2001)。

ライフストーリーは救済シーケンス (redemption sequence) と汚濁シーケンス (contamination sequence) という二つの型がある。救済シーケンスはネガティブな出来事の後にポジティブな結果が続くライフストーリーの組み立て方である。汚濁シーケンスは救済シーケンスの正反対のもので、ポジティブな出来事が台無しになるライフストーリーの組み立て方である。エリクソンの言う世代継承性 (generativity) の高い人は救済シーケンスを語りやすく、世代継承性の低い人は汚濁シーケンスを語りやすい。救済シーケンスは状況がより良くなるストーリーの語り方である。一方、汚濁シーケンスは状況が前進しても、それをひっくり返して台

無しにするストーリーの語り方である (McAdams, 2013)。佐藤 (2008b) は、ライフストーリーの構造は自己と関わりと指摘し、この二つのライフストーリーの組み立て方を紹介している。世代継承性の高い人によく見られる救済シーケンスを持つライフストーリーは redemptive self と呼ばれることもある。redemptive self はアメリカの文化の中で力のあるストーリーであり、アメリカ文化の中心となるものを反映していると考えられている (McAdams, 2013)。

ライフストーリーそのものが自己やアイデンティティと関連することが示されている。

7. ライフストーリーと青年期

青年期は発達の観点からも、ライフストーリーを作ることで、自己に関連する働きが生まれることを示唆している。自伝的推論をするための認知的能力と自伝的推論をしようという動機づけが青年期に発達する (Habermas & Bluck, 2000)。青年期に人はアイデンティティを探す発達課題に直面し、自伝的推論を使ったライフストーリーを作るように動機づけられる。ライフストーリーを作ることで、人生の見方に一貫性を作る (Bluck & Habermas, 2001)。また、家族との会話がアイデンティティの感覚を作ることも指摘されている。親は子どもの語りを会話の中で手伝い、アイデンティティの感覚を作る (Pasupathi & Weeks, 2011)。親の会話の仕方が子どもの語り方に影響するという指摘や、子どもは親と会話することで記憶をストーリーとして発達させるという指摘もある (仲, 2008/2012; 槇, 2008/2012)。青年が自伝的推論を使ってライフストーリーを作るが、一人だけで作るのではなく、家族などとの会話における語りも影響する。

8. 自己と語り

そもそも自己を語り、ストーリーにまとめることそのものが自己の連続性を支えるという可能性もある。

心理学の分野にはストーリーの特徴を心理学的に研究するナラティブ研究の分野がある。やまだ (2021) によれば、ナラティブとは「広義の言語によって語る行為と語られたもの」と定義されている。ナラティブの定義は多様であり、語り、ストーリーなどの用語と区別することは難しい状況にある (森岡, 2015)。心理学ではナラティブは人が体験した出来事を他者に伝えるために、ストーリーを作るという機能が共通に想定されていることが多い。自分が体験した出来事を伝えるため、伝えたい出来事に関連する出来事を選び出し、それを並べて筋の通ったストーリーにする。そして、そのストーリー全体

から、どんな体験だったのかを他者に伝える機能である (森岡, 2015; やまだ, 2000)。森岡 (2002/2017) は人の心の中にある自己のストーリーが自己、アイデンティティの時間を越えた連続性を支えると述べている。ストーリーの構造そのものが時間の流れを記述することができるので、時間を越えて連続した自己の感覚も表現できるからである。

森岡 (2002) はストーリーとして体験した出来事をまとめ秩序づけることで、自己の連続性を確認し、自己の未来についても暗示できるとしている。アイデンティティには自己の連続性という時間感覚が必要で、アイデンティティにはストーリーの形式が必要であると述べている。野村 (2008) は自己を語ることに、体験した出来事をストーリーに組織化し、人生を意味づけ、自我同一性を維持する働きがあると述べている。

人がストーリーを作ることで、個人の一貫性を得るという指摘もある。Fivish, Habermas, Waters & Zaman (2011) はストーリーが個人の一貫性を支えると考えている。近代化する以前の社会は、伝統的に安定した場所に住み、決まった役割や人間関係を持っていた。その安定から一貫性が支えられていた。近代化した現在の生活は住む場所、役割、人間関係が多様に変化し続ける。周りの環境から一貫性を得ることは難しい。そこで、多様な断片を一貫したストーリーとしてまとめることで、個人の一貫性を得るようになったという考え方を示した。

そもそも人が自己について語り、ストーリーにまとめることが自己と関わりとも考えられる。

以上のようにライフストーリーを作ることで、自己の一貫性が得られたり、ライフストーリーそのものが自己と関わり可能性が指摘されていたり、自己を語りことそのものが自己の連続性を支えることが指摘されている。

自伝的推論の働きは自伝的記憶のストーリーの構造を作り出す。特に自伝推論がライフストーリーを構成するのなら、ライフストーリーを作ることそのものを通して自己と自伝的記憶が関連する可能性もある。

9. 自伝的推論とは

自伝的推論が記憶と自己をつなぐ重要な役割を果たす働きならば、今後、記憶と自己の関係を知る上でももっと検討していく必要がある過程であると言える。自伝的記憶の研究では個別の出来事の記憶を検討することが多く、自伝的推論は十分に検討されてこなかったという指摘がある。また、自伝的推論を検討するためのパラダイムも確立されていない。自伝的推論の検討は始まったばかりである (佐藤, 2008a, 佐藤・清水, 2012)。基本的に、自伝的推

論の定義は Habermas の定義が踏まえられているが、その定義は明確にまとまっているわけではない。推論のプロセスと自伝的推論の結果、生じたライフストーリーや教訓などが混在している状態にあるという指摘もある（佐藤，2014）。

このようにこれから詳細な検討を行い、どのような働きがあるかを検討する必要がある自伝的推論であるが、本レビューから以下のような特徴があると思われる。

一つ目は、自伝的推論はストーリーを構成する過程そのものに当たる働きであると思われるということである。佐藤（2008/2012）の指摘するように自伝的推論は想起された出来事の意味を考えたり、出来事同士をつないでいくことでストーリーを構成する過程そのものであると考えられる。自伝的推論の働きは特にライフストーリーを構成する。

二つ目は自伝的推論は自伝的記憶と自己の両方に関連する概念であると考えられる。佐藤（2011/2014）は記憶がどのように自己を支えるかを明らかにするためには、自伝的推論の過程に着目することが不可欠であると指摘している。自伝的記憶にはストーリーを成すという独自の特徴がある。この独自の特徴を作り出すのが自伝的推論である（佐藤，2014）。自伝的推論は特にライフストーリーを構成する。ライフストーリーそのものは自己と関連するストーリーであるため、自伝的推論がライフストーリーを構成することで、自伝的記憶と自己をつなぐ可能性もある。

以上の二点から自伝的推論は以下のように定義することができるだろう。自伝的記憶がストーリーやストーリーの一部を成すという特徴のうち、ストーリーそのものを作り出す働きが自伝的推論である。特に自伝的推論がライフストーリーを構成することで、自伝的記憶と自己の両方をつなぐ可能性がある。

10. 自伝的推論研究の流れ

日本では、自伝的記憶に対する自伝的推論の働きが検討され始めている。佐藤（2014）は先行研究で使用された尺度の項目や内容分析の基準を KJ 法で整理し、自伝的推論の過程と自伝的推論の内容の二つに自伝的推論の働きを分けて捉える枠組みを示した。自伝的推論の過程は記憶のリハーサルや反芻、自伝的推論に使用した心的エネルギーが当てはまる。自伝的推論の内容は、漠然と出来事が重要であるという評価、出来事と自己のつながりを具体的に省察すること、出来事同士がテーマや因果関係で結びついていることが当てはまる。自伝的推論が実際に働く過程、その内容が示されていると考えられる。この自伝的推論の枠組みを元に包括的に自伝的推論を測定する自伝的推論尺度も開発されている（佐藤，

2015；佐藤，2017）。

従来、自伝的推論はトラウマなどネガティブな出来事における意味づけが検討されてきたが、ポジティブな出来事のほうが少しのリハーサルで強い自伝的推論が引き出される結果が示されている（佐藤・清水，2012；佐藤，2016）。佐藤（2019）は自伝的記憶の三つの機能である、自己機能、社会機能、方向づけ機能はもともと自伝的記憶に備わっているのではなく、自伝的推論を通して発揮される可能性があることを指摘している。

堤・清水（2020）では忘却への懸念尺度の作成に際して、関連する概念として自伝的推論尺度との関連性が検討されている。忘却への懸念とは体験した出来事をいつか忘れてしまうだろうという思いへの抵抗感や不安感を指す。忘却への懸念は出来事を意味づけることに伴うという点で自伝的推論と関連が検討されている。

田中・園田（2017）は高齢者に手がかり語法を用いて日常的な出来事を想起させた際の語りの中に自伝的推論の語りがどれだけ含まれるかを調査している。語り方には「出来事の解釈」、「人生の糧」「変わった自分（変わらない自分）」、「原因」、「転機」という5種類の語り方のタイプが見られたことを示している。日常的な出来事において自伝的推論が起こっていることが示されている。

このように日本では、主に自伝的記憶に関わる自伝的推論の働きを中心に検討され始めているところである。今後はライフストーリーなど自己の面からも自伝的推論を検討することで、自己と記憶の両面が関連する自伝的推論の働きが明確になっていくと思われる。

自伝的推論と関連する研究分野は多い。高齢者の回想研究、自己の発達をライフストーリーやナラティブなどから捉えた研究、青年のライフストーリーの発達、ストレスフルな経験の意味づけ、教訓と洞察、自伝的記憶の機能との関連が指摘されている（佐藤，2008a；佐藤，2014）。

特にライフストーリーの発達と自伝的推論の発達を探ることで、自伝的推論がどのようにライフストーリーを構成し、自己と関連するかを明らかにすることができるだろう。

臨床の分野では、異なった過去の側面を一貫した自己に統合することを助ける自伝的推論の働きが、健康的なアイデンティティに貢献していると指摘している。自伝的推論の質と愛着の安定が関連するという指摘もある。一方、自伝的推論を知性的に使いすぎ、感情を抑圧する可能性があるという指摘もある。自伝的推論は臨床の場面でも注目されていることを Habermas(2011) は示している。McAdams(2013) では、アルコール依存症の自助グ

ループのメンバーのストーリーは救済シーケンスの方が勝ったストーリーになっていることを示している。また、年齢が上がって救済シーケンスのあるライフストーリーを語ることができるようになることで犯罪率が低くなる傾向があると述べている。ライフストーリーそのものを作ることがメンタルヘルスに良い影響を与えるならば、自伝的記憶をライフストーリーにまとめる自伝的推論も深く関連することが考えられる。

11. 結論と今後の課題

自伝的記憶は日常記憶研究の流れの中で出現した、特に自己と関わる記憶である。自伝的記憶は想起される際、ストーリーの形式をとるという指摘がある通り、自伝的記憶とストーリーを関連させるような理論が展開されてきている。そのような中で自伝的記憶のストーリーの構造を作り出す自伝的推論という概念が提唱された。自伝的推論は自伝的記憶のストーリーの構造を作り、自己と出来事を結びつける働きをする。自伝的推論は特にライフストーリーを構成する。

自伝的推論は自己と記憶の関係を明らかにするうえで注目する必要があると指摘されている。本論文では自伝的記憶がストーリーやストーリーの一部を成すという特徴のうち、自伝的推論がストーリーそのものを作り出す過程そのものに当たること、特にライフストーリーを構成する特徴から、自伝的記憶と自己の両方をつなぐ可能性があることを指摘した。どのように自伝的推論が自己と記憶をつなぐのかは明らかになっていないが、ライフストーリーそのものは自己と関連することが指摘されている。そのため、自伝的推論の働きでライフストーリーが作られることで、自伝的記憶と自己がつながる可能性がある。

自己と記憶の関係を探る上でも今後、様々な観点から自伝的推論の働きを探る必要がある。自伝的記憶に対する自伝的推論の検討は既に始まっており、知見が蓄積され始めている。ライフストーリーなど自己からの自伝的推論も検討することで、どのように自伝的推論が記憶と自己を関連させるのか、具体的な働きを明らかにすることが今後の自伝的推論研究の課題になるだろう。

引用文献

- Bluck, S. & Habermas, T. (2000) . The Life Story Schema. *Motivation and Emotion*, 24, 121-147.
- Bluck, S., & Habermas, T. (2001) . Extending the study of Autobiographical Memory : Thinking Back About Life Across the Life Span. *Review of General Psychology*, 5, 135-147.
- Conway, M., A. (2005) . Memory and the self. *Journal of Memory and Language*, 53, 594-628.
- Fivush, R. & Habermas, T., Waters, T.E.A., & Zaman, W. (2011) . The making of autobiographical memory: Intersections of culture, narratives and identity. *International Journal of Psychology*, 46, 321-345.
- Habermas, T. (2011) . Autobiographical Reasoning: Arguing and Narrating from a Biographical Perspective. *New Directions for Child and Adolescent Development*, 131, 1-17.
- Habermas, T., & Bluck, S. (2000) . Getting a Life : The Emergence of the Life Story in Adolescence. *Psychological Bulletin*, 126, 748-769.
- Habermas, T., & Ehlert-Lerche, S. & de Silveira, C. (2009) . The Development of the Temporal Macrostructure of Life Narratives Across Adolescence: Beginnings, Linear Narrative Form, and Endings. *Journal of Personality*, 77, 527-559.
- 堀内 孝 (2012) コンウェイの自己—記憶システム 梶田叡一・溝上慎一 (編) 自己の心理学を学ぶ人のために (pp.97-110) 世界思想社 .
- 家島明彦 (2012) マクアダムスのナラティブ・アイデンティティ 梶田叡一・溝上慎一 (編) 自己の心理学を学ぶ人のために (pp.63-72) 世界思想社 .
- 岩田純一 (2008) . 記憶と自己の発達 心理学評論, 51, 24-36.
- 榎 洋一 (2008/2012) ライフスパンを通じた自伝的記憶の分布 佐藤浩一・越智啓太・下島祐美 (編) 自伝的記憶の心理学 (pp.76-89) 北大路書房 .
- McAdams, D.P.(2001). The Psychology of Life Stories. *Review of General Psychology*, 5, 100-122.
- McAdams, D.P.(2013). The Redemptive Self Stories Americans Live By Revised and Expanded Edition New York:Oxford University Press.
- 森岡正芳 (2002) 自己の物語 梶田叡一 (編) 自己意識研究の現在 (pp.29-44) ナカニシヤ出版 .
- 森岡正芳 (2002/2017) 物語としての面接【新装版】ミメシスと自己の変容 新曜社 .
- 森岡正芳 (2015) ナラティブとは 森岡正芳 (編) 臨床ナラティブアプローチ (pp.3-17) ミネルヴァ書房 .
- 仲 真紀子 (2008/2012) 子どもの語りと感情表現 佐藤浩一・越智啓太・下島祐美 (編) 自伝的記憶の心理学 (pp.186-198) 北大路書房 .
- 野村晴夫 (2008) . 自己を語ることと想起すること

- 心理療法場面を手掛かりとしたその機能連関の探索— 心理学評論, 51, 99-113.
- 太田信夫 (2011/2014) 記憶研究の歴史と現状 太田信夫・巖島行雄 (編) 現代の認知心理学 2 記憶と日常 (pp.2-25) 北大路書房.
- Pasupathi, M., & Weeks, T. L. (2011). Integrating Self and Experience in Narrative as a Route to Adolescent Identity Construction. *New Directions for Child and Adolescent Development*, 131, 31-43.
- Radvansky, G.A. (2017). Human Memory Third Edition. London:Routledge.
(ラドヴァンスキー G.A. 川崎恵理子 (監訳) (2021) 記憶の心理学—基礎と応用— 誠信書房.)
- 佐藤浩一 (2008a). 自伝的記憶の構造と機能 風間書房.
- 佐藤浩一 (2008b) 私の構造—自伝的記憶の構造 仲 真紀子 (編) 自己心理学 4 認知心理学へのアプローチ (pp.152-169.) 金子書房.
- 佐藤浩一 (2008/2012) 自伝的記憶の機能 佐藤浩一・越智啓太・下島祐美 (編) 自伝的記憶の心理学 (pp.60-75) 北大路書房.
- 佐藤浩一 (2011/2014) 自己と記憶 太田信夫・巖島行雄 (編) 現代の認知心理学 2 記憶と日常 (pp.180-207) 北大路書房.
- 佐藤浩一 (2014). 自伝的推論—概念ならびに評価方法の整理と包括的な枠組みの提案— 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 63, 129-148.
- 佐藤浩一 (2015). 教師の思い出、家族の思い出に対する自伝的推論—教職志望、世代との関連— 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 64, 145-156.
- 佐藤浩一 (2016). 成功経験と失敗経験に対する自伝的推論 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 65, 187-198.
- 佐藤浩一 (2017). 成功経験と失敗経験に対する自伝的推論とアイデンティティ発達、適応との関連 認知心理学研究, 14, 69-82.
- 佐藤浩一 (2019). 教育実習の振り返りにおける自伝的推論—自伝的記憶の3機能と主題的一貫性に着目して— 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 68, 157-178.
- 佐藤浩一・清水寛之 (2012). 中学校時代の教師に関する自伝的記憶：日常的な出来事に対する自伝的推論の検討 認知心理学研究, 10, 13-27.
- 高橋雅延・佐藤浩一 (2008). 「自己と記憶」の特集にあたって 心理学評論, 51, 3-7.
- 高橋雅延 (2000/2011) 記憶と自己 太田信夫・多鹿秀継 (編) 記憶研究の最前線 (pp.229-246) 北大路書房.
- やまだようこ (2000) 人生を物語ることの意味—ライフストーリーの心理学— やまだようこ (編) 人生を物語る—生成のライフストーリー— (pp.1-38) ミネルヴァ書房.
- やまだようこ (2021) ナラティブ研究—語りの共同生成— やまだようこ著作集第5巻 新曜社.
- 田中京子・園田直子 (2017). 語りの中で自伝的推論はどのように生起するか 久留米大学心理学研究, 16, 17-29.
- 堤 聖月・清水寛之 (2020). 自伝的記憶における想起された出来事の特徴と忘却への懸念との関係 心理学研究, 91, 332-338.